

令和7年度第2次 連合教職大学院 入学試験問題

[高度教職開発専攻]

小論文

注 意

1. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
2. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。
3. この問題冊子は、表紙を除いて2枚である。もし不備の場合は、直ちに申し出ること。
4. 解答用紙は1枚である。所定欄に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。
5. 下書用紙は、2枚である。
6. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。(横書き 八〇〇字以内)

問一 現代の学校教育において著者が述べる「価値ある経験」とは何か、簡潔に述べなさい。

問二 それを踏まえて、「価値ある経験」を学校教育の中で実現させるとしたら、あなただったら情報機器をどのように活用するのか、具体的に述べなさい。

「個別最適化された学び」について、別の角度から考えてみましょう。

インターネットの発展やスマホの普及等、社会の情報化が進む中で、私たちが利用可能な情報の量は爆発的に増大しています。何かわからないことがあっても、スマホやパソコンで検索するだけで、多くのことはすぐにわかります。「面倒な計算や簡単な翻訳も、スマホやパソコンがあれば瞬時に終わります。少し複雑なことでも、インターネットで解説してくれる文章や動画を探せば、短時間で理解することが可能になります。

それどころではありません。読みたい本も、聴きたい音楽も、見たい動画も、その多くはインターネットで探し、必要に応じて数百円から数千円の代金を支払えば、すぐに読んだり視聴したりすることができま

す。要は、デジタル化された情報やコンピュータによる簡単な処理については、無償もしくは安価で即座に得られる状況が実現しているわけです。

このような状況にあつては、情報の価値はすぐに下がり、ゼロになる、あるいはゼロに近づいていきます。映画は公開当初には映画館に行かなければ見られませんが、少し経過すればサブスクリプションサービスの定額料金の中で試聴したり、テレビで無料放送されたりします。ポピュラー音楽などは、発売前からミュージックビデオが無料で公開されることが多く、CDや配信で購入するのはアーティストを応援するとか握手券などの特典目当てという意味合いが強くなっています。新聞を購読しなくても、ニュース記事はインターネットで無料で見られるのが当たり前になりました。インターネット普及以前には高額で購入するのが当たり前だった百科事典も、今は無料で利用できるWikipedia等にとってかわられています。

情報の価値が下がっている中で、相対的に価値が高くなっているのが、経験です。象徴的なのが音楽ライブで、音楽ライブに参加する経験はライブ映像には還元できない固有の価値を持つと考えられており、入場料や交通費やグッズ代等の高額の費用をかけて音楽ライブに参加する人が多くいます。音楽ライブなどのイベントへの参加、素敵な飲食店での食事、旅先での種々の体験、音楽の演奏やスポーツを行うこと等々、デジタル情報に還元できない経験に費用をかけることは、社会の情報化が進んでも変わることがありません。

社会の情報化は、情報の価値を下げ、相対的に経験の価値を高めています。こうした傾向は、今後ますます顕著になるでしょう。

このような状況にあつて、単純な知識を覚えることの価値はかなり疑わしくなっています。もちろん、文章を読んで理解するとか、ごく簡単な計算を暗算で行うといったことはできた方がよいでしょう。しかし、難しい漢字を手書きで書けるように覚えたり、複雑な計算を筆算で正確にできるようにしたりすることは、ほぼ必要ないはずで

高度教職
開発専攻

科目名

小論文

令和7年度第2次
連合教職大学院
入学試験問題

味はないでしょう。こうしたことはすべて、仮に習得していなかったとしても、スマホなりパソコンなりがあれば、すぐにできてしまうのです。

「個別最適化された学び」は、ともすると、このようにスマホやパソコンに代替されそうなことに特化した内容の習得ばかりに使われることになりかねません。コンピュータで個別学習を進めるのであれば、問題と答えが1対1対応しているような単純な課題が扱いやすいからです。漢字の練習や計算の練習ばかりをコンピュータを使って進め、その履歴を分析して個別最適化すれば効率はよくなるでしょうが、そもそもスマホやパソコンで代替できることについて効率を上げてもそのこと自体にあまり意味はないはずです。

学校教育においても、情報の価値は下がり経験の価値が相対的に上がると考える必要があります。今後の学校教育を考える際には、学校が提供できる価値ある経験とは何かが問われるべきであって、情報機器の活用もそうした価値ある経験を実現するという観点で検討されるべきです。

(出典)藤川大祐『教師が知らない「子どものスマホ・SNS」新常識 学校を変える可能性と危険性』
(教育開発研究所、二〇二二年)(一部改変)